2022年度　身体動作学研究会　ニュースレター

日本赤十字北海道看護大学　山本憲志

日赤看護大の山本です。近況報告。

2022 年の年末も押し迫った 12 月 22 日（木)、午前中に毎年依頼されている美幌町での健康寿命アップ講座を終え、参加者からの質問も多く、意気揚々、晴天の中、大学に帰った。そこから天候が急変！夕方から猛吹雪となり、明日はさらに悪化するとの予報。過去に何度か大学に閉じ込められた経験があるので、その日は剣道の稽古も取りやめ（中止になった？)、早めに帰宅。翌日の午前中は津別町高齢者大学で炭酸泉の講演を依頼されていた。事前に先方から連絡があり、恐らく延期だろうと思いつつ、明朝、改めて決定するとの事。23 日（金）は早朝から車（写真）の発掘開始！その途中、大学から休校の連絡。ただ、津別町から連絡が無いので何とか車を動かせる状態にしなければと必死の雪かき！よし終わったと思ったところ講演延期の連絡。やれやれ。気を取り直し、誰もいない大学に出勤。大雪と仕事がはかどったクリスマスとなりました！

国士舘大学　和田匡史

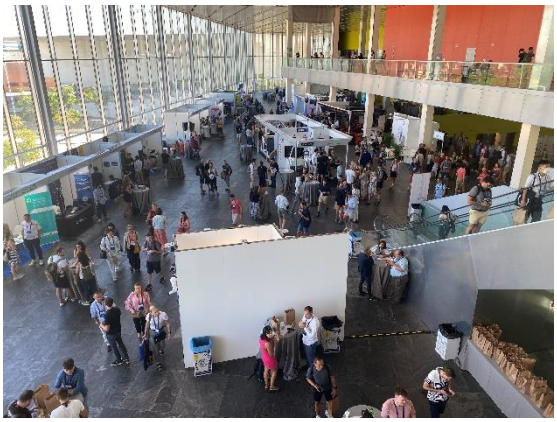
27th ECSS 2022@Sevilla

2020 年から大流行した COVID-19 の影響で国内外問わず学会活動は中止になったり、オンラインでの開催が多かった中で、2022 年 8 月 30 日からスペイン・セビーリャで開催された第 27 回 ECSS は約 3 年ぶりに対面での学会開催となりました。今回、身体動作学研究会の会員である山本憲志先生（日本赤十字北海道看護大学）と参加し、山本先生は高濃度人工炭酸泉浴が筋機能を回復させる可能性について、私はアスリートにおける炭酸泉浴が疲労を回復させる可能性について発表しました。アスリートの炭酸泉浴、睡眠によるリカバリーについてはまだまだ発表数が少ないですが、少しずつ興味を持ってもらえているようです。

今回の学会は会場がとても広かったこともあるかもしれませんが、やはりまだ対面での参加者が少なく感じられ、また日本からの参加者も出国、帰国時の検査が煩わしいためかいつもの ECSS よりも少なかったです。しかし、現地で参加する学会では研究者の生の声を聴くことができ、やはり学会は現地で参加したほうが得るものが多いことを再確認しました。2023 年度は7 月にパリで開催されます。

今回は学会中にサッカーのスペインリーグの開催と重なったため、地元セビーリャ FC vs FC バルセロナの試合を観戦することができました。世界トップクラスのパフォーマンスを生で見る機会はめったにないので、バスとメトロを乗り継いで会場に行きましたが、昨年の上位チーム同士の対戦とあってコロナ禍にもかかわらず、すごい観戦者の数でした。COVID-19 は帰国前後のチェックともに陰性で感染しなくて良かったです。

学会の現地参加は、研究発表だけでなく、対面でコミュニケーションが取れること、学会以外での新しい発見など、やはり学会は現地での参加が良いですね！



中京大学　渡邊航平

西山先生の研究室にて、2005 年に学部を卒業、2007 年に修士課程を修了した渡邊航平です。現在は中京大学スポーツ科学部に勤めております。今年度、勤務校より永年勤続者（10 年）の表彰を受け、「もう 10 年も経ったんだ」と実感しました（2022 年度は11 年目）。初めの 9 年間は国際教養学部および教養教育研究院にてスポーツおよび健康に関する教養教育に携わってきましたが、2021 年度より学内異動でスポーツ科学部へ移り専門教育を行っております。研究室が名古屋市内から豊田市内へ移ったこともあり、私にとっては非常に大きな変化でした。豊田に移動してからは、これまでの高齢者や疾患者を対象とした研究に加えて、アスリートや子どもを対象とした研究も積極的に進めています。このように様々な対象や目的で研究を進めることで、1 つ 1 つの研究に対しても、できるだけマクロな視点から導入することや成果を社会還元していくことを心掛けています。こういった姿勢は、教養教育で「スポーツや健康に興味がない」学生たちを対象に教育活動をしてきたことと少し似ている気がします。研究室のメンバーにも「我々の研究領域に興味関心が無い分野の人々」にどう評価してもらえるか、を常に考えて研究を進めるようにと話しています。研究会や学会にて、学生の時のように、身体動作学研究会の皆様に色々と御意見がいただけるのを楽しみにしております。

研究室メンバーと。研究室で保有するハイエース氏はフィールド測定には欠かせない大切な研究室の一員です。

国士舘大学　平野智也

国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科助手の平野と申します。身体動作学研究会では、運営委員として会計を担当しております。

私は2008年に日本体育大学に入学し、学部の4年間は陸上競技部で十種競技に取り組みました。また、学部3年時にスポーツバイオメカニクスゼミ（船渡和男先生）を履修したことから「ヒトを対象とした動作分析」に興味を抱き、日本体育大学大学院博士前期課程・後期課程と船渡研究室で活動してきました。その後、日本体育大学でスポーツバイオメカニクス研究室（1年）と大学院トレーニング科学系（2年）で助手を務めさせていただきました。現在は国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科助手として、大学院生と共に研究活動を行っております。

研究の興味は、ゴルフスイングやヒトの歩行・走行についての動作分析です。身体動作学研究会、国内・国際学会に積極的に参加して参りますので、会員の皆様との交流を楽しみにしております。

スポーツ実技の合間に

国立スポーツ科学センター　袴田智子

近況報告

パラリンピックスポーツに携わって

2015 年よりパラリンピック競技に関わるようになり、本年度で 8 年目になる。冬季競技を中心とした医科学サポート、また様々な競技種目、障がい種別の体力測定に携わってきたが、まだまだ課題も多く、ありがたいことにやるべきことが山積みである。「人間の限界」に挑戦している選手を目の当たりにすると、日々驚きの連続であり刺激をもらう。

最近では、パラリンピックスポーツに関する学会に国内外ともに参加するようになった。International Paralympic Committee (IPC)が主催する国際会議（VISTA Conference）では、メディカル関係の研究者はもちろんの事、バイオメカニクス、栄養、運動生理等の学術分野の研究者の参加も多かった。VISTA 会議の特徴として、「Classification」のトピックスにおいて演題が多数出ているところにある。クラス分けについては、パラリンピックスポーツにおいて重要なトピックスであり、医科学的なエビデンスを基にしたクラス分けの基準を作ることが求められているが、まだまだ各方面においてエビデンスが足りていない状況だそうだ。私も、近年、クラス分けに関する研究を少しずつ進めている。「クラス分けの基礎となる研究」となると、状況によっては、非常にセンシティブで繊細なテーマであるが、パラリンピックスポーツを支えるという観点では、非常に重要であり、やりがいのある課題であると思っている。

専修大学　柏木悠

専修大学に入職し5年目になったが、コロナによって通常のサイクルをこなせたのは、実質3年程度である。日体大から総合大学に就職したため、大学システムや規模、ましてや所属は商学部のため分からないことばかりであった。さらに3年目は教員組合の書記長を務め、教員の給与や待遇について大学法人との団交などを経験した。おかげで大学組織の仕組みを学んだり、他分野と教員との繋がりができたことは収穫であった。専任になると仕方ないことであるが、教務の調整、学生部、育友会など大学業務にも追われている。大学の授業は、教養体育実技科目と、トレーニング科学論など文系の学生向けの講義を担当している。また、専修大学ではスポーツ推薦の学生には、スポーツウェルネスプログラムという専門カリキュラムが設定されており、そこでは、スポーツバイオメカニクスを担当している。しかし、体育・スポーツ系の学生ではないでの手取り足とりの授業で苦戦をしている。

研究活動はと言うと、学内の専修大学スポーツ研究所に所属している（なぜか、商学研究所にも所属している)。施設には、日本で初めての常圧低酸素室や西脇鉄鋼トレッドミル、ロード社のエルゴメーター、水中体重計など40年前としては考えられない設備が整っている（現在は、常圧低酸素室のみ現役)。これらは、元法学部教授の前嶋孝名誉教授が、カルガリーオリンピックスピードスケート500m銅メダリストの黒岩彰選手、リレハンメルオリンピック500m銅メダリストの堀井学選手のトレーニングに用いていたそうだ。近年は、北京オリンピックでは、森重選手が500m銅メダルを獲得しており、特に専修大学のスピードスケート部はトップアスリートを輩出している。前嶋先生は、退職後も積極的に現場指導をされ、朝早くから学生のトレーニングに付き合い、自ら測定姿をしている姿は、非常に印象的であった（昨年に監督を勇退された)。また、厳しい順位ではあるが、駅伝でも常圧低酸素室をトレーニングに用いており、3年連続箱根に出場を決めている。このように専修大学のスポーツ科学はトレーニング現場をベースに受け継がれてきているようだ。

私自身はというと、研究所の奥に埃をかぶっていたAMITのフォースプレートを一枚発見し、メンテをして思

考錯誤し、新たな実験を計画している。フォースプレートが１枚あるだけでも非常に有難い。また最近は、ゴルフクラブの違いによる動作分析にも取り組んでいます。面白い結果が出そうで、次年度の学会等で発表予定である。進みは遅いがなんとか自分でできることを取り組んでいる。この原稿を書きながら、専修大学での５年を振り返り、次なる目標を考える良い機会となった。

今は使われていない水中体重計

今は使われていないトレッドミル

常圧低酸素室

スライディングボード